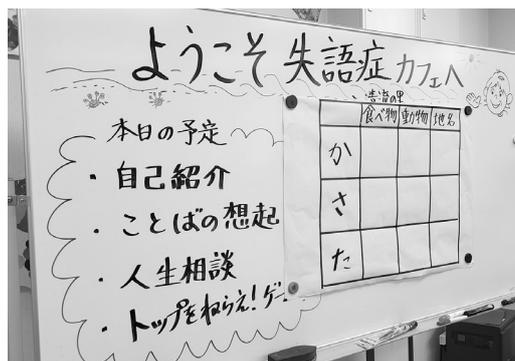


失語症カフェの活動 —地域と共に創るコミュニケーションのユニバーサルデザイン—

谷口 明 ●いび川農業協同組合 デイサービスセンター 清流の里 言語聴覚士

立木 一美 ●岐阜県厚生農業協同組合連合会 岐阜・西濃医療センター 揖斐厚生病院 言語聴覚士



要旨

失語症は、毎年6万人発症し、そのうち失語症が残存するのは、年間3万人とされている。失語症は、大脳の言語中枢が損傷され言語機能が低下するため、外出や他人との交流の機会が減少し社会から孤立しがちとなる。そのため、社会参加や就労において困難が多く、失語症者や家族は、心理的負担を抱えながら生活を送っている。

失語症者の社会参加推進のためには、失語症について障害の理解や支援のニーズを把握しつつ、地域社会の中で外出や交流する活動の必要性があり、2017年度に地域の通所介護(デイサービス)事業所において、失語症カフェを開設した。

2018年度からは、各都道府県実施主体の「失語症者向け意思疎通支援者の養成事業」が、岐阜県において全国で東京に次いで2番目に開始され、失語症カフェが実習の場として活用され、意思疎通支援者派遣の事業展開につながっている。

失語症カフェの活動の継続により、失語症者の社会参加の機会を増やし、地域住民との交流を図りながら、地域包括ケアシステムの実現に向けて支援・サービス提供の充実が今後とも重要である。

1. 背景と目的

失語症の原因は、脳血管障害であり、損傷された場所によって症状が異なる。さらに、大脳の言語中枢が損傷され「聞く・話す・読む・書く」という言語機能が低下するため、困っていることを自分で人に伝えられない状態となる。

さらに、失語症に伴って起こる問題として、障害が理解されにくいことがある。例えば、失語症という言葉を知ると、「話すこと」ができない状態と思われがちで、発話ができない場合、筆談や50音表での会話を求められることがあるが、これらは、失語症についての誤解であり、正しい支援とは言えない。

また、コミュニケーションの障害のため外出をためらい、他人との交流の機会がなくなり社会から孤立しがちとなる。これまで、当たり前であったコミュニティを失うことは、孤立・孤独の状態を生み、自発的な活動や参加を妨げ、そのため、社会参加や就労において困難が伴いがちとなる。

したがって、失語症者の社会参加を推進するためには、障害の理解や必要な支援を把握し、地域社会において、コミュニケーションの場や外出の機会を増やすことが必要である。

このような経緯から、2017年度より、地域の通所介護(デイサービス)事業所に失語症カフェを開設した。

2. 活動の方法

失語症カフェは2017年度から年4回実施しており、参加者は、失語症者とその家族・言語聴覚士・介護福祉士・介護支援専門員・地域のボランティア・通所介護事業所スタッフ等である。

活動内容としては、(1)当事者及び家族の交

流、(2)地域住民との交流、(3)リハビリテーションや就労等についての情報交換、(4)症状理解のための学習、(5)地域住民への啓発活動、(6)リハビリテーションを兼ねた合唱・書字・理解力発話力向上プログラムの実施、(7)「失語症者向け意思疎通支援者の養成事業」受講者実習、(8)言語聴覚士養成校学生の見学研修等である。

「失語症者向け意思疎通支援者の養成事業」において厚生労働省より、2018年度開始の通達が全国都道府県に向けてあり、11都府県で事業化された。岐阜県からの委託で岐阜県言語聴覚士会によって養成研修が開催された。2018年度30人、2019年度15人の受講者に対して、計40時間にわたる講習、実習が実施され、実習先として失語症カフェが活用された。

3.現状の成果・考察

2019年度において失語症カフェを4回実施した。参加者内訳及び延べ人数は、失語症者25名・家族12名・失語症者向け意思疎通支援者の養成研修受講者38名・スタッフ16名であった。失語症者の年齢層は、20～90代であった。

毎回、言語聴覚士やスタッフが季節や身近なニュースなどを題材とした課題を企画し、合間には、コーヒーや菓子を提供し、交流しやすい雰囲気を作った。

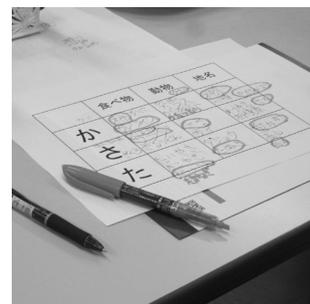
「失語症者向け意思疎通支援者の養成事業」においては、2018年度修了者、2019年度受講者に対して、失語症カフェが実習先となり、コミュニケーション支援技法を学ぶ機会となった。今後、意思疎通支援者として派遣されることとなっている。

失語症者からは、「明日も頑張っていこうと思うことができる場所である」「楽しいから自分の居住地でも開設してほしい」との感想がある。

このように、失語症カフェは、失語症当事者同士や家族間の交流、コミュニケーションの場として機能している。同じ障害を持ち共感に基づいた仲間づくりが、生活の質の向上に有効である。また、他職種の参加により地域連携が促



左手で書字の失語症者をボランティアが支援



みんなで力を合わせて課題が完成

進され、介護予防や社会復帰につながっていく。実際、失語症者が就労支援事業所スタッフと交流後、それがきっかけで就労支援を受けるケースもあった。友人や知人が増え、公共交通機関を使っでの外出、旅行、あるいは復職や再就職への広がりなどは、大きな成果と言える。

4.今後の展望

失語症カフェが、失語症者の外出のきっかけや社会参加促進につながり、地域住民との交流が始まっている。可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい生活を人生の最期まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムの実現に向けて住民の尊厳の保持と自立生活の支援を目的とし、活動の継続性、活動財源確保、支援・サービス提供体制等の構築を見据えていきたい。

<引用文献>

- 1) 一般社団法人日本言語聴覚士協会編：失語症者向け意思疎通支援者指導者養成研修テキスト 2018
- 2) 森田秋子 中橋聖一ら 現場が伝える言語聴覚士の生活期リハビリテーション：医歯薬出版株式会社。東京。82-83 2018



失語症者・家族・ボランティア等が各テーブルで交流・課題に取り組む